





藤澤無籍
鬼鹿との牙藏
芳町藝妓
兒重也の鐘吉

勢肌彩俱利伽羅

龜遊堂梓
元田彫長

上



A515
1

勢肌彩俱利伽羅二編序

初編の足場よまごづの愛出度くの音頭引出を
木遣りの勢肌喧嘩と火事身と捨る東京男の達引
磨上たる茶釜の光り常盤の松葉も繁り琴の音るね
鐘の音の響き四方よ高砂の其嶋臺と三編よ三三九度
大尾の艶場仲人役ハ作者と画師鶴と縁の龜遊堂実入
源次も八兄も熊公も松五郎と鐘吉の結納祝二編で一番

使客と四海よその名辰の年

川上さるん

義よるとたの向う水無月

たむき子記

<48-8303>





女さき
男さき
見雷也
鐘吉

縁て又此雷也の落着の四
 手橋最十節ふもえん
 ののと又藤ももあやぢく
 論を面敷と幸ひ越中傳
 の波打きふつふだーわ
 ぶおれんとおせーと母方
 の敷路より願をせむる
 二人の男よきへらせし旅
 海やうよ園よまだはて
 まりぬけつ船よ飛ぶ
 そのおふ曲者まてとほ
 舞よ舞うた見むは是の
 如し不星をん何うの一髪ふ



▲あてのうらとこふれバ
 我信長長火火の
 片角へ尋うちをを云



云長ね
 おのあまて
 おとと徳吉
 胸とらふたて
 止さるお
 片角

せまき...
 小舟...
 父...
 母...
 兄...
 弟...
 妹...
 姉...
 夫...
 妻...
 子...
 孫...
 親...
 祖...
 父...
 母...
 兄...
 弟...
 妹...
 姉...
 夫...
 妻...
 子...
 孫...
 親...
 祖...



舟...
 橋...
 門...
 眼...
 歯...
 白...
 多...
 小...

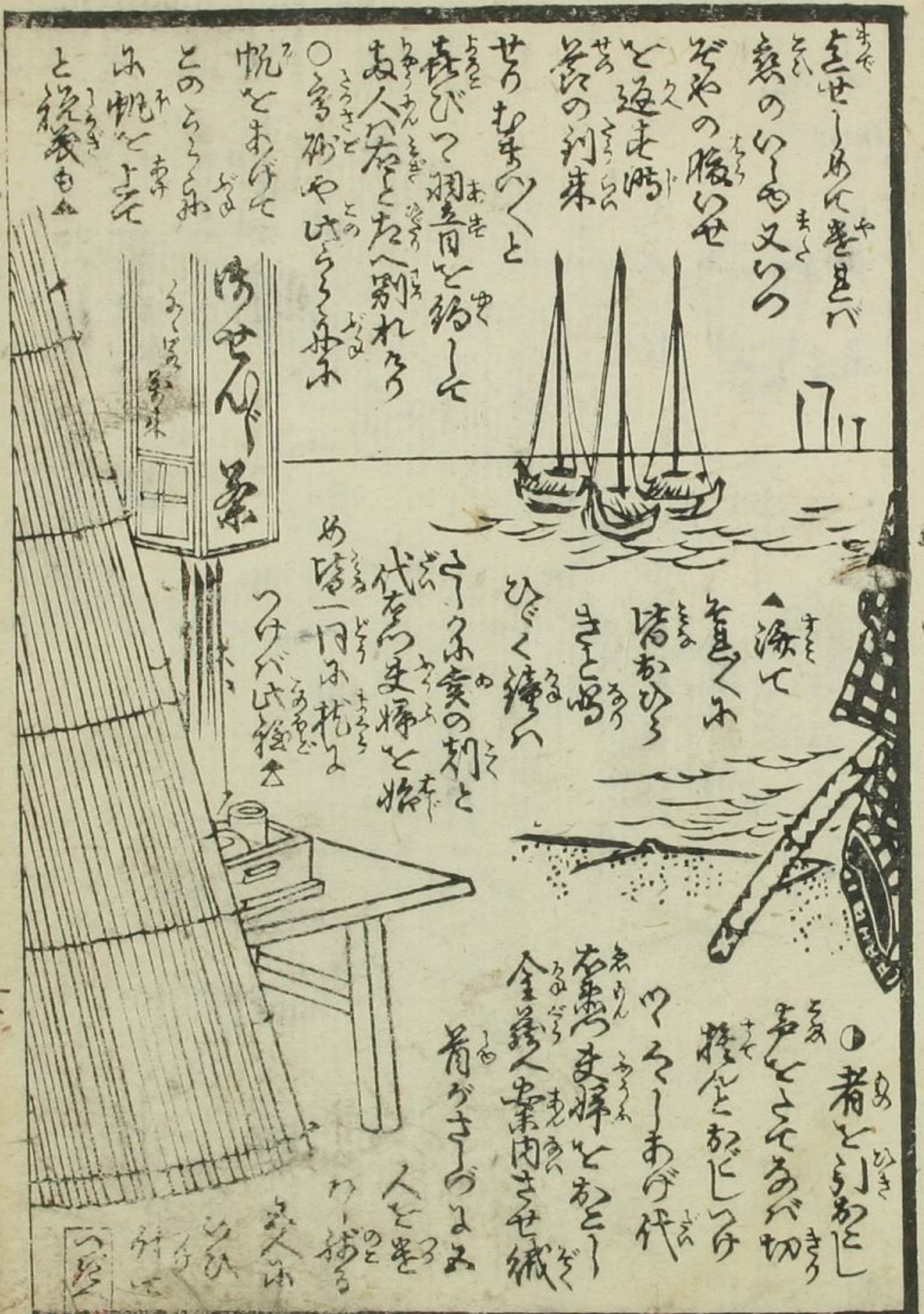


鐘...
 目...
 眼...
 二...
 三...
 四...
 五...
 六...
 七...
 八...
 九...
 十...



ついでと云ふ
此方近く
舟り舟より上を何
やらんさやた終
つと情より一
至りおしな
小波を舟り
代とて金とや
そのあり
羽目の子
の別と合國小
り之忠び
金いりしより

さうらの島は
あや最後由
知らぬ森入る
徳の島と云
らけた島ひ入る
土人小
引さげ
入る



と世しめは是は
意のいふ又り
ぞの腹いせ
と返す時
其の別味
せりおまのくと
森びつ羽音と釣しと
お人右とたへ別れり
○言物やばらう舟小
帆とあひて
このらうらお
ふ帆とよそ
と後義由

△海へ
まきこふ
ほおひ
まきこふ
ひく海へ
行ふ愛の別と
代をのま棒と物
め棒一日本花よ
つひは後太

○者と別れし
声ととてあは切
棒金おじつひ
つらうあが代
右のま棒とをさし
全義と業内させ織
着がさうらよふ
人とを
わらう

つぎ 腰の括り来る
その奥や衣のわた
袴をまらちまよ
疾具長持人入也
きせてそまの被着
腰うちを代を帯
解とひきかきまを明り
てし一糸をち縁め
ふかふかや我小ゆ
このま解と足よ縁
とふと
泥籠よ
よく解と縁の面



女中の小政
ガゴウセ何
ら何
よさらん
ゆく序の中女
連て何や
せらと

ついで月も花
さ女の顔も
くらやましく
思ひぬがごと
いふの中も全
かく見ぞ破
地獄の沙汰
流記より光
るん全うい
とりの者のらん
那高又この美
如とそいせて
とふもの



かてる身
とある
きえも
入る
ありあ
み代を
氣のま
ね何
とさ
か
か
き
ま
か
か
か
か
か



△出で
来り
生々
くろく
うたふ

ついでに
一由
秘表の

ついでに
おぼろ
たの
小栗組の
先生の
百五十
とさ
うたふ

久小栗組の

△で
みう
せん
先生
おの
たの
たの
たの
たの

△ふし

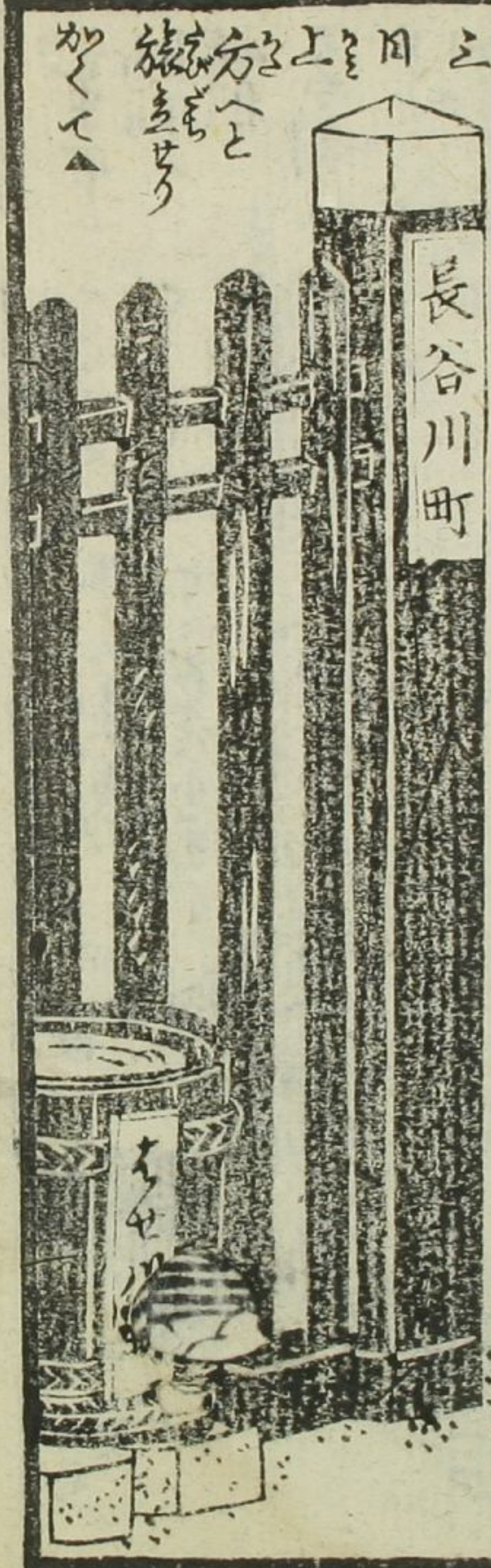


△出で
来り
生々
くろく
うたふ

△ふし
おぼろ
たの
小栗組の
先生の
百五十
とさ
うたふ

△で
みう
せん
先生
おの
たの
たの
たの
たの

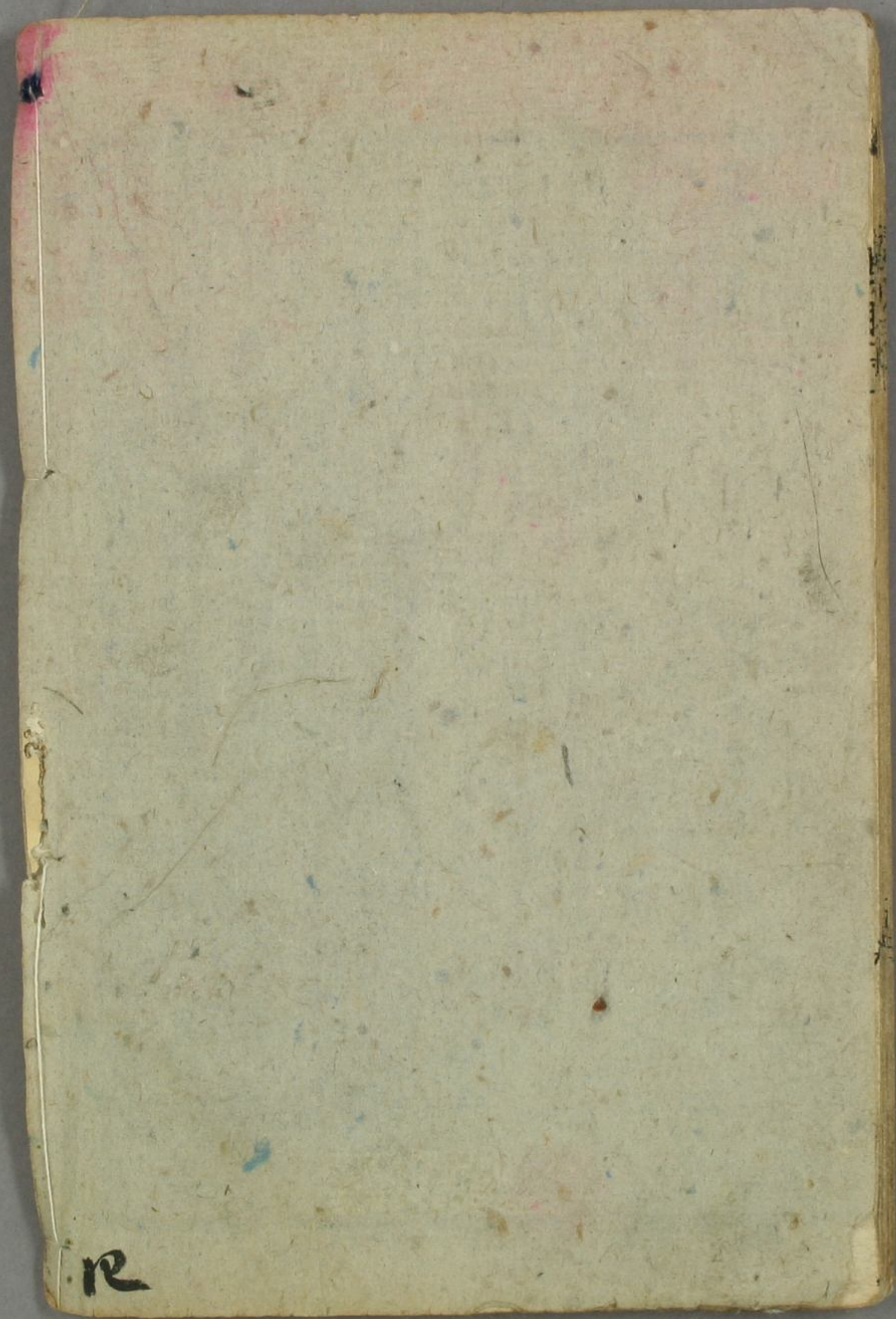
ぶき
 松を平のあま
 由名後兄のちの茶室
 の後流うし事
 のし終んふ世
 ありあせせ生由安ん
 白一終終ふ終けあ
 剛るなりとを所考の



伊四子ある横山
 代をあの方の
 婚の夜逢
 ちべり金銀その地
 教るあを具市き
 春の是れをきよきと
 終へ切ふ代をらを

中の巻へ

010190517611



re



A 515
2



執事
中

48-83047

つきむら けりて返る
とやありしお
かよ由存び
その別立
名を具
を化をを
をてその
身へ替り
あて集り
しおの
松み希が
存びひと
かあるぞ



松らんと客の月小場
つとく隆長へ
女のかさと
備共は湯
より戻す
若女之眼
清かやい
ありと坊
方々お親父
の車はか風屋
包ををお雨き
後二さん
松み希
しと

おの思ひ
とま
去後一月日
閑へあく
よりなる
清くはる
盛りのも唐
身あつし
ろびるま
そのあつし
月和
ひよ小町
盛りの



その上
松み希
世々
松と



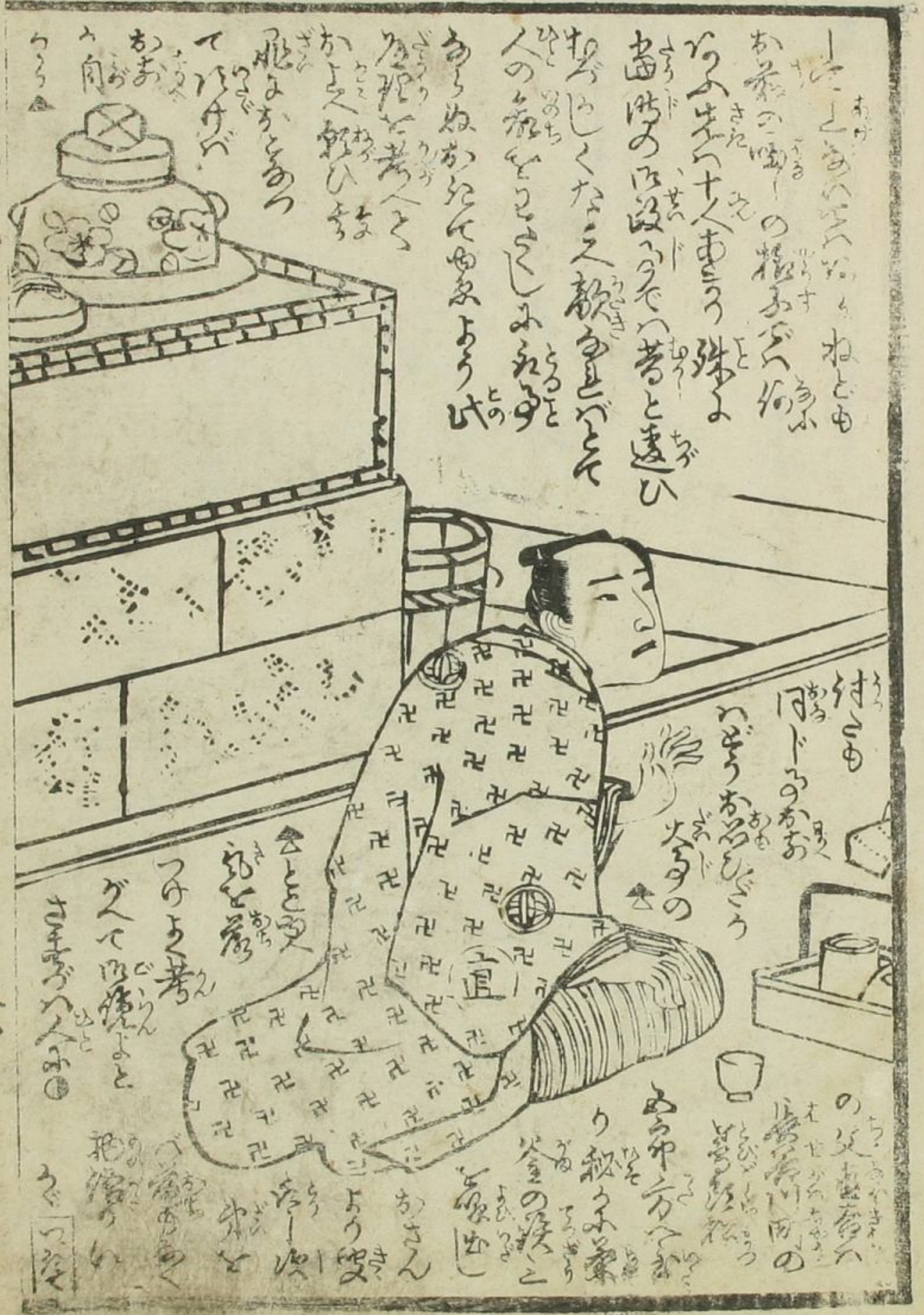
つぎ遊
 招いてまじ
 おぼろの
 横山と云
 出るれど
 心もまじ
 ぐう不止
 ざりしが
 若やま
 人あり
 と云ふ
 ちんちん
 鎌をま

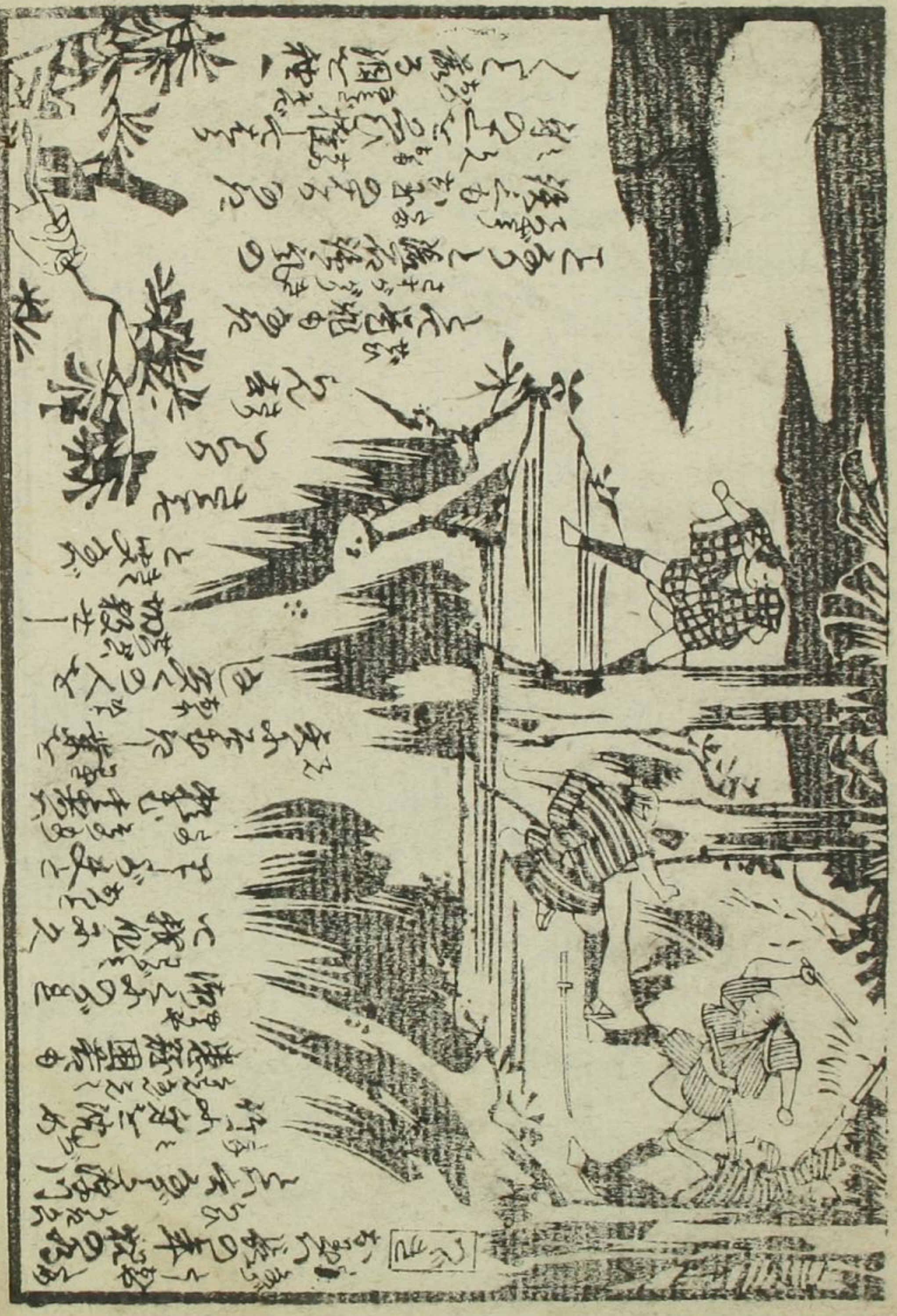
かまの大人とその又
 敵の女をりまじしとのふ
 中ま
 家の
 まりけ
 ちんちん
 つまて
 文庫
 文庫
 色は
 けい
 入後の
 車のみ又横



てそつちの娘ふい
 掃さんふちのせり
 私いふまじ
 横山と云
 のておぼ
 せぬ因い
 と云ふ私
 まいれん
 去年の八月
 横山と云
 左は方へ
 解まふお
 の中へ勝ま
 うま殊ま

山へ入也織
 が親のまを
 せし養老の
 銀を世に
 親父が
 岩津町の
 村田を
 くらん
 ありれ
 のふ
 ちんちん
 結ま
 横山と云







つぎ 別々〜云々の合はる本
 山崎と利を死骸は名も泥田人
 投しつゝいゝ家へ入てとらふま
 女房娘を海難をまこととて
 命ごと天運悪を油くして一度
 あつと一月とあや〜と云ふ者もあ
 わぐと市へ入るゝ不夜の室にまふ
 らしく若らしてあつた仲居方へ
 およ奪ひ〜金と湯水の〜もた
 ちこ〜大屋に〜とら家内の
 者い〜とら小栗組の〜月
 らつと〜月の運命〜の金と〜とら
 とま〜とら〜とら〜とら

●糸湯を〜とら〜とら
 小栗組の〜とら〜とら
 小栗の悪者組と市
 油

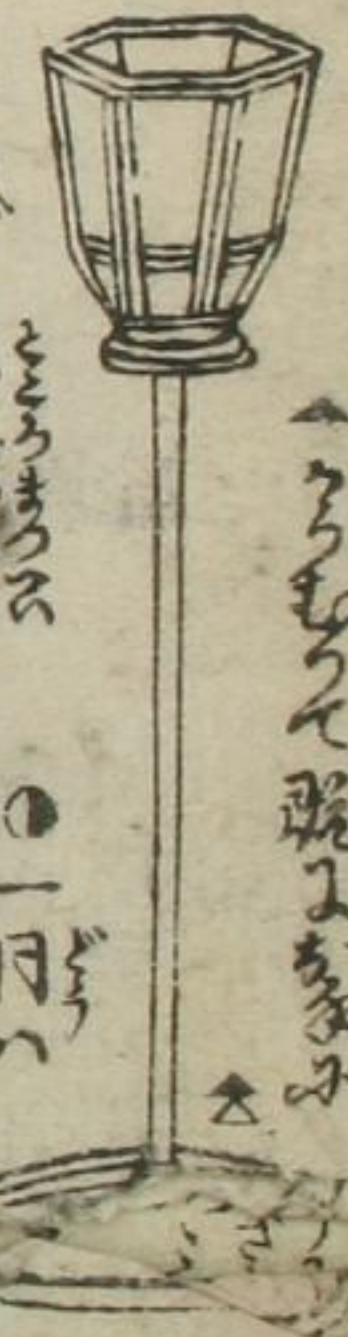


あつと〜とら〜とら
 小栗組の〜とら〜とら
 小栗の悪者組と市



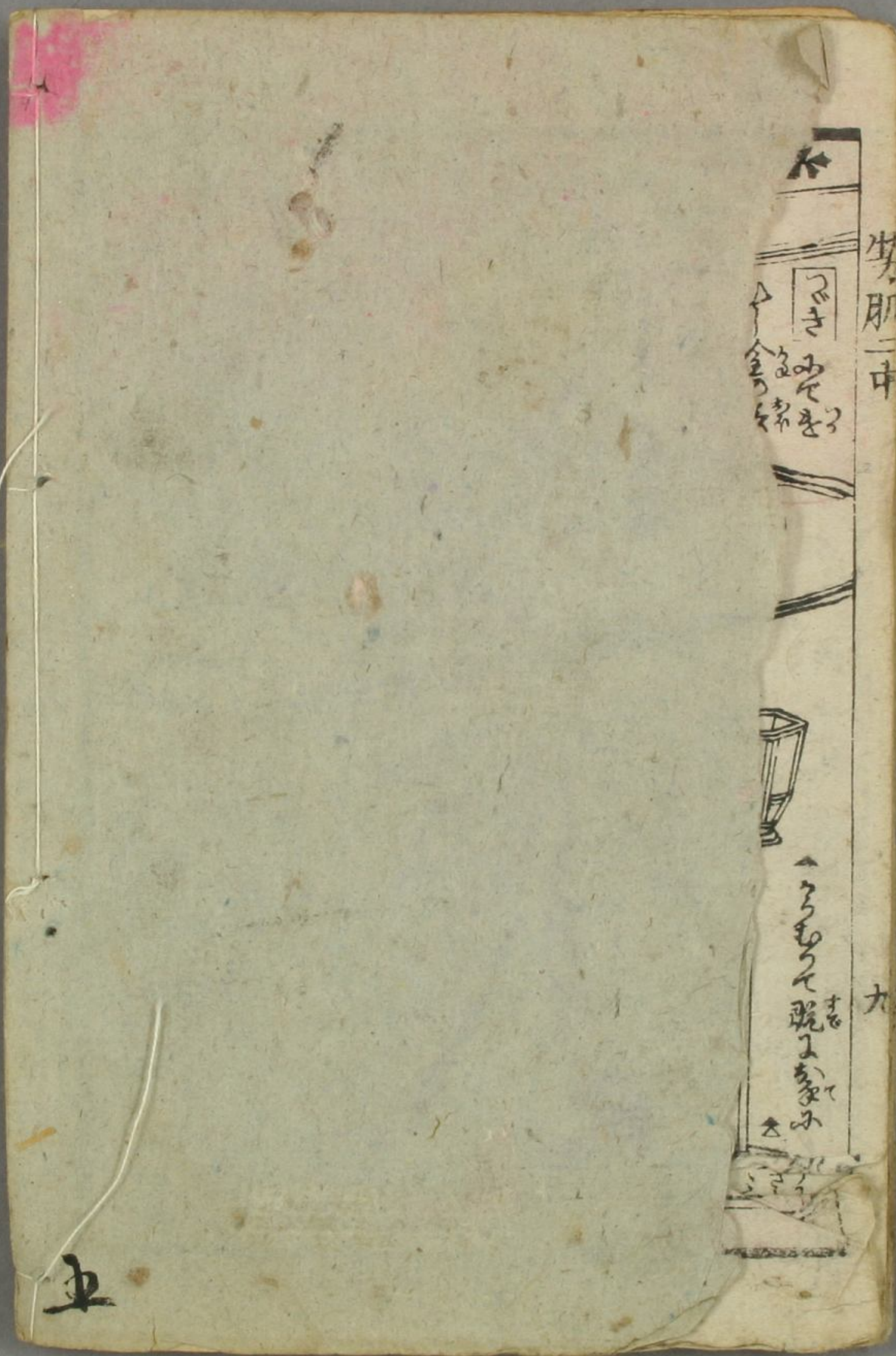
つきみそを
ひきかき
まゆへの
ひきかき

さくらんぼの松平が
酒をたぐらうたまら
遊ばしうぐいさうた
柄通る金た袋の
柄通るのあま
掛る後之が小栗
あまの捕縄を
まどくんとち
隙一ゆき
その月あつた
お栗組の
下巻へ



さくらんぼの松平が
酒をたぐらうたまら

010190517620



生肌中

今
金
子



た
ら
も
て
腕
ま
か
へ

九

中

川上鼠邊編輯
梅堂國政画



中の巻

みあふんと
後を尋る
こがま血の
酒めぐる周
果と盛の
是ぞ此世の
別とよやが
てぞおひ知
是るるおて
後この世の
雲の別と



松



小糸組の改め
るん是を別人
何んぞ
鬼木の
おの
初て
十一
おん
改め用
と松年
二と
松

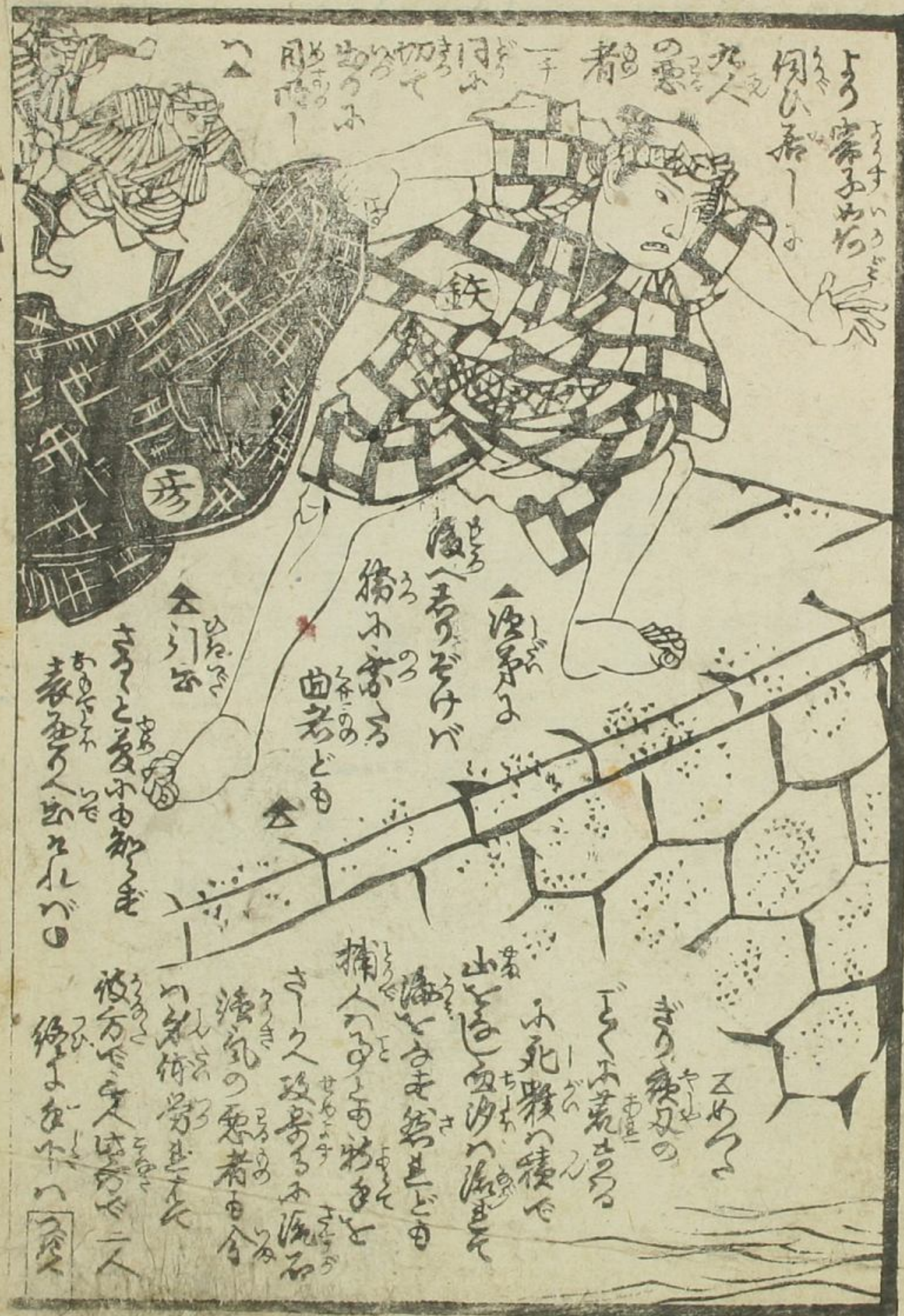
用ひつと
松年
と松年
初つて
小糸
細の
研
十分
及び
休めん



松
小糸
初つて
細の
研
十分
及び
休めん

勢肌二下







とのまの
 汗あつきの
 夏の夜は
 涼しい
 今更けの
 子守歌
 居るは
 んまろく

小倉
 五郎

松五郎の
 車座の
 石の
 松五郎
 すま
 場と



松五郎の
 車座の
 石の
 松五郎
 すま
 場と

松五郎の
 車座の
 石の
 松五郎
 すま
 場と

つぎ研と確し番のほうのふり月
が研十分の海ささい松を帯ぐ
中産せしらゆつをぶひく
の気盛屋し咽すおはは
おもある中お産後のは
お松お帯の家あより産
おらとぬと不慮女中お同
おみわうと斗りおさより
の産後の産紙とまると引
明達切にせり眠る
お帯おのりおと
産後お松おの



お帯おのりおと
産後お松おの
おらとぬと不慮女中お同
おみわうと斗りおさより
の産後の産紙とまると引
明達切にせり眠る
お帯おのりおと
産後お松おの

お帯おのりおと
産後お松おの
おらとぬと不慮女中お同
おみわうと斗りおさより
の産後の産紙とまると引
明達切にせり眠る
お帯おのりおと
産後お松おの

川清

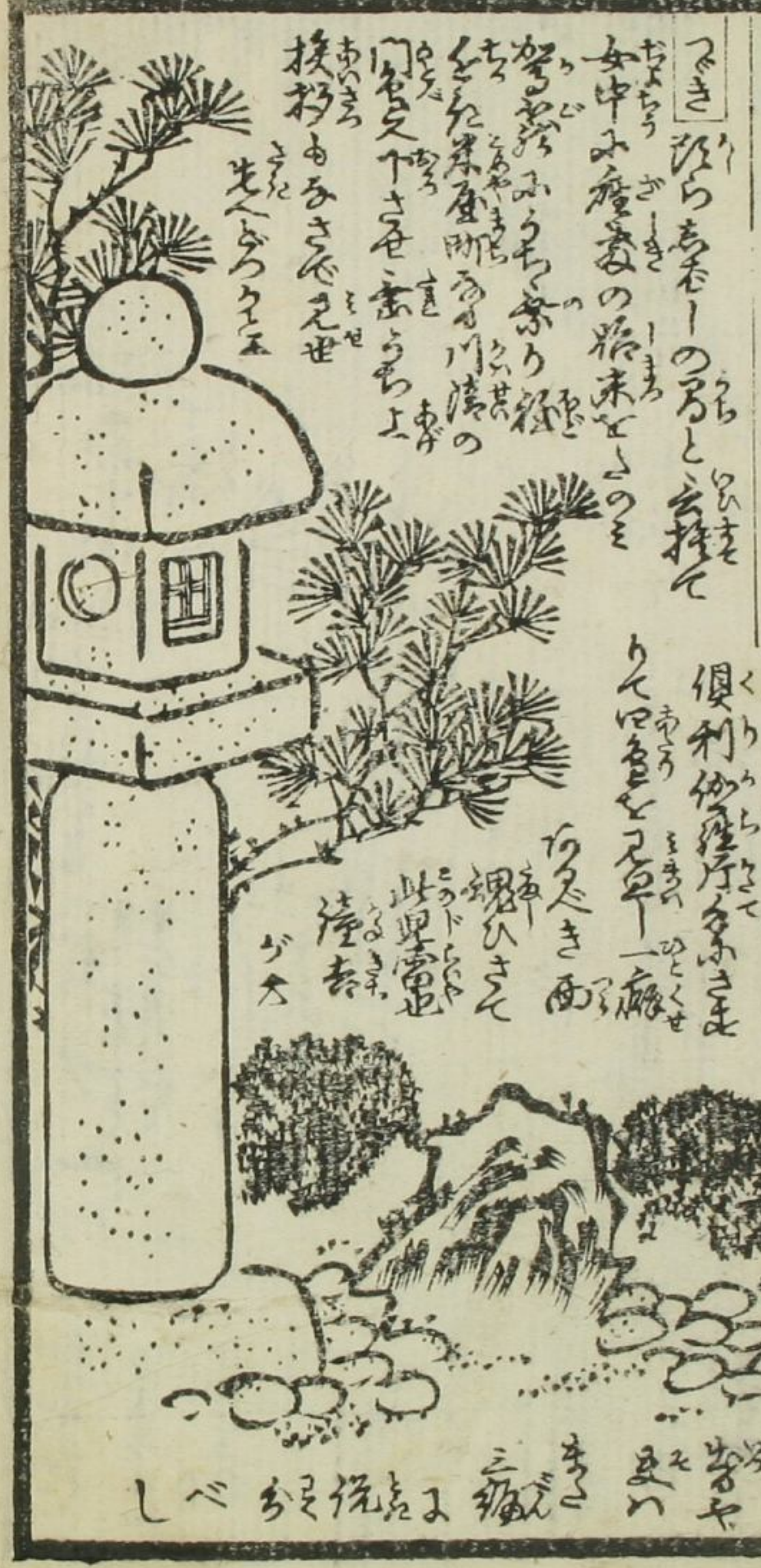


お清おのりおと
産後お松おの
おらとぬと不慮女中お同
おみわうと斗りおさより
の産後の産紙とまると引
明達切にせり眠る
お帯おのりおと
産後お松おの

お清おのりおと
産後お松おの
おらとぬと不慮女中お同
おみわうと斗りおさより
の産後の産紙とまると引
明達切にせり眠る
お帯おのりおと
産後お松おの

川上鼠邊編輯

梅堂國政画



此の石燈籠は、
 女中ふくさの
 名を以てし、
 其の形は、
 女中の姿に
 似せしむる
 故に、
 女中石燈籠
 と稱す。

此の石燈籠は、
 女中ふくさの
 名を以てし、
 其の形は、
 女中の姿に
 似せしむる
 故に、
 女中石燈籠
 と稱す。

此の石燈籠は、
 女中ふくさの
 名を以てし、
 其の形は、
 女中の姿に
 似せしむる
 故に、
 女中石燈籠
 と稱す。

010190517638

